

第 14 回国際 18 世紀学会に参加して

金沢友緒（日本学術振興会特別研究員 PD）

2015 年 7 月 27 日～31 日、オランダ、ロッテルダムで国際 18 世紀学会 ISECS(the International Society for Eighteenth-Century Studies)第 14 回大会が開催された。ISECS は、18 世紀の自然、社会、人文諸科学の様々な領域を専門とする研究者によって組織された国際学会である。4 年に 1 度、大会が開かれ、ここ最近ではロサンゼルス、ダブリン、モンペリエ等の都市が開催場所となっている。2015 年度、第 14 回の ISECS の舞台にはロッテルダムが選ばれた。そして、17 世紀を通じて高度の海運・海軍技術と国際交易の拡大によって経済的發展を遂げ、近代ヨーロッパのパワー・バランスに重要な役割を果たすにいたったオランダの歴史的役割を踏まえ、Trade and Commerce in the Eighteenth Century が共通論題として掲げられた。

私は当時所属していたサンクト・ペテルブルグのロシア文学研究所(プーシキンスキー・ドーム)の研究員数名と共にこの学会に参加した。



本大会の研究発表はエラスムス大学で行われ、ウェルカム・パーティーは市の中心に位置する聖ローレンス教会で開かれた。



数名の報告者で構成されたセッションが 229 ほど設けられ、その中の幾つかはさらに細かく分類されており、かなり大規模な会であった。エラスムス大学の中には「上海」、「東京」、「オクスフォード」、「ハイデルベルク」、「アテネ」、「プラハ」等、世界の有名都市の名前が付いた教室がいくつもあり、それらの「国際都市」が報告の舞台となったのである。因みに私が発表した場所は「オークランド」であった。

各セッションでは報告に加えて、活発な意見交換が行われた。欧米からの参加者が多く、18 世紀の近代ヨーロッパにおける知的階層の間で主流であったフランス語に敬意を表し、報告、議論、研究者間の交流には英語とフランス語が使用された。



私は「18世紀ロシア・エリートとヨーロッパ思想の伝達」のセクションで、「ロシアのエリートとドイツにおけるその学問体験(Russian Elites and their Academic Experiences in Germany)」というテーマで報告した。19世紀におけるロシア文学・文化の飛躍的な成長は、18世紀の啓蒙主義期に作られた社会的文化的基盤に支えられてはじめて実現したものである。この基盤を作る上で重要な役割を果たした人々に、18世紀後半、エカチェリーナ2世治世下で当時学問の場として評価の高かったドイツの諸大学へ国費留学し、西欧文化に学んだ知的エリート達がいた。この若きエリートの1人であり、後に国家事業の担い手となって、ロシア国家の法律と経済流通システムの整備や教育制度改革のために尽力したO.П.コゾダヴレフの作品を取り上げ、彼の啓蒙家としての視点と関心がどのように現れているかを明らかにすることが、報告の目的であった。とりあげたのは、彼がE.P.ダーシュコワとともに編集に携わっていた雑誌《ロシア語愛好者の話相手》の最終巻に発表した自身の未完の物語詩『夢』である。この詩にはコゾダヴレフの啓蒙家としての思想が幼少期の教育の充実という形で表現されており、彼の活動を知る上で重要な手がかりが含まれているにもかかわらず、今日に至るまで研究対象としては看過されてきた。報告では、『夢』の分析を通して、啓蒙主義時代における文学と国家事業の緊密な結びつきの例を提示した。

扱ったのがコゾダヴレフという知名度の低い人物の作品だったためもあり、批判的な指摘等はなく、比較的好意的に受け入れられた。なお、報告の中で詩の一部をロシア語で音読したところ、笑いが起き、それについて尋ねたところ、テキストの中の表現が面白いとのことであった。このセクションにはロシア語のわかる聴衆が多かったようである。



写真は現在ソルボンヌで教鞭をとるロシア人研究者によるロシアとフランスの関係についての報告で、フランス語で行われた。パワーポイントの映像が聴く者の理解を助けてくれ、ありがたかった。

全体としては自然科学、政治経済、思想に関するセクションが目立っていたが、その中で私の関心を引いたのは「啓蒙時代のヨーロッパにおける言語選択」のセクションであった。特に、モスクワから参加したルジェウツキー教授の「18世紀ロシアの国民教育におけるラテン語」では、ロシアにおけるラテン語、ドイツ語、フランス語といっ

た外国語の教育の形態とその変遷が取り上げられており、当時の啓蒙家達の教育改革に対する取り組みを考える上で興味深いものであった。

学会では初日のウェルカム・パーティーのほか、研究報告の合間に盛りだくさんのエクスカージョン、ロッテルダムの図書館への訪問や音楽会等が用意されており、参加者は時間を作って、思い思いに街へ繰り出した。



なお、アカデミズムの背景にあるサロンのような雰囲気は本学会の特徴のひとつで、それを反映して、7月29日には船上で豪華なコンgres・ディナーが開催された。研究報告を済ませていた私も、セクションでは別々であった研究所の知人と合流して、楽しいひとときを過ごすことができた。豪華な料理あり、心地よい音楽ありのパーティーで、参加者達は港町ならではの風景を味わい、まだ明るい夏の夜を楽しんでいた。